

令和6年度 な花講習会

令和6年8月21日
京築普及指導センター
JA福岡京築

1 作型と作付目標

(1) 作型

作型	品種	播種	定植	収穫期間
I型	はるかな	8/25~8/31	9/25~9/30	10月下旬~3月中旬
II型	はるかな	9/1~9/10	10/1~10/10	11月中旬~3月中旬
III型	宮内菜	9/1~9/10	10/1~10/10	11月下旬~4月下旬

(2) 作付目標

作型分散して、長期間（1月~4月）の安定出荷をめざしましょう。

作型	I型	II型	III型	合計
作付目標面積	3a	4a	3a	10a
作付割合	30%	40%	30%	100%

2 育苗

(1) 育苗準備

- ①セル育苗の場合、育苗場所は日当たりと風通しの良い涼しい場所を選定する。
雨よけ施設での育苗は、長雨対策（ビニル被覆）と高温対策（遮光資材）が可能である。
- ②セルトレイは、根鉢形成のため育苗箱の下にたる木等を置いて底を空気にさらし、かん水が均一になるように水平に設置する。
- ③準備する資材（10aあたり）は、下記のとおりである。育苗本数は定植本数の3300株/10aより1~2割多く育苗する。

・128穴セルトレイ：30枚	・培土：スミソイルN150 3袋
・種子：4000粒（約40ml）	・寒冷紗、防虫ネット 等

※セルトレイの培土の充填量は、軽すぎると乾きやすく、根鉢が崩れやすくなるので注意する。

(2) 播種

- ①播種の深さは、浅いと子葉未展開や浮き苗が多くなり、逆に深いと胚軸が徒長し、発芽が不揃いとなるので1cm程度とする。
- ②播種後のかん水は、トレイの底から水が出るまで十分に行い、発芽揃いまでは乾燥させないようにこまめにかん水する。
- ③培土の乾燥防止のため、寒冷紗等の遮光資材を被覆する場合は、7割程度子葉が見え始めたら遮光資材を夕方除去する。除去が遅れると胚軸が徒長するので注意する。

(3) 育苗での「かん水管理」

- ① 育苗前半は、乾燥しないように散水を行い、発芽・発根を促す。
夕方のかん水は、苗が徒長するのでかん水量に注意する。
- ② 発芽後のかん水は、夕方に培土表面が乾く程度のかん水量とする。
- ③ 日中高温の場合は、葉水程度散水し、葉面温度を下げる。
- ④ 育苗後半（本葉3枚目以降）は、根鉢の形成を促すため、散水量をやや減少させる。
- ⑤ 葉色が薄くなってきたら、液肥（500～800倍）を適宜かん注する。
- ⑥ 定植苗の目安は、播種後25～30日で、本葉3～4枚の苗とする

3 ほ場準備

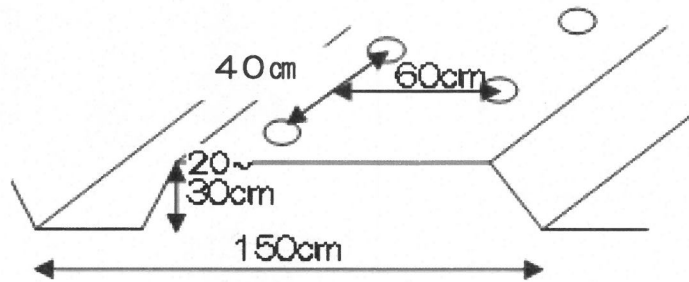
- (1) ほ場は、排水良好で日当たりの良いほ場を選定する。
- (2) 水田後作のほ場を活用する場合は、水稻の中干をしっかりと行き、ほ場が乾燥しやすいよう、水稻栽培中から準備する。
- (3) 根こぶ病発生を避けるため、排水不良田での作付けは避ける。
また、根こぶ病は土壌pHが低いと発生しやすいので、土壌pHを高めるため必ず石灰資材を使用する。
- (4) 転作田の場合、堆肥と石灰資材は、定植1ヵ月前までに投入し十分に耕起しておく。
水田後作の場合は、天気予報を参考に、計画的に基肥施用と畝立てを行う。
※水田後作で稲ワラが残っているほ場は、石灰窒素を20kg/10a追加する。
ただし、石灰窒素施用後から定植までは10日間以上あけるようにする。
- (5) 定植7～10日前に、基肥施用、畝立て、マルチ張りを行う。畝立て時の耕耘は、定植後の活着を促すため土塊が小さくなるように心掛ける。

○施肥基準 (kg/10a)

肥料名	土改材	基肥	追肥		
	定植 1ヵ月前	定植 7～10日前	年内・春先 (～12月・2月下～)	厳寒期 (1月～2月上)	備考
牛フン堆肥	3000	—			—
(ど根性の場合)	1000～2000				
炭酸苦土石灰	140	—			
発酵鶏糞	—	195			
ほう素入り硫加磷安250	—	60			
CDU S555	—	40			
NK化成2号	-	-	20kg/回		
磷硝安加里S646	-	-		30kg/回	計8回程度

○栽植様式と栽植本数等

畝幅	株間	条間	条数	10a当たり	128穴トレイ
				定植本数	予備苗込
150cm	40cm	60cm	2条千鳥	3300株	30枚



畝立て例

4 定植と定植後管理

- (1) 定植前にセルトレイにかん水すると、苗が抜き取りやすくなる。
- (2) 定植時、胚軸は傷つきやすいので、葉先を持ち作業を行う。胚軸が長い場合は、株元に土を寄せて定植し、自立させる。
- (3) 定植後は植穴にかん水を行い、根鉢と土を密着させる。降雨が少ない場合は、活着するまで数回かん水する。
- (4) 定植後に活着が遅れている場合(7日後に新葉の展葉が見られない等)は、液肥(500~800倍)をかん注する。
- (5) 秋季にほ場が乾きすぎた場合は、畝間かん水を行う。ただし、畝間に水が溜まらないように注意する。

5 収穫と摘葉

(1) 摘心収穫（10月下旬～11月上旬）

- ①主茎を出荷する場合は、本葉 15 枚程度の時、本葉を 8 枚残して摘心・収穫する。
- ②主茎を出荷しない場合は、本葉 8～10 枚で摘心する。早めに摘心すると、側枝の発生が早く、揃いが良い。
- ③切り口に雨水が溜まらないように、斜め切りを行う。

(2) わき芽収穫

- ① 1 次側枝は、株元の葉を 1～2 枚残して収穫する。
- ② 2 次側枝は、1 枚残して収穫する。

(3) 摘葉は、側枝の伸びを良くするため、株元が陰となるような親葉を摘む。

(4) 春先は、気温の上昇とともに葉が混み腋芽が多くなるので、混み過ぎた葉や腋芽を整理し、常に腋芽を 10 本程度残す。収穫が追いつかない場合は、一度深切りをする。

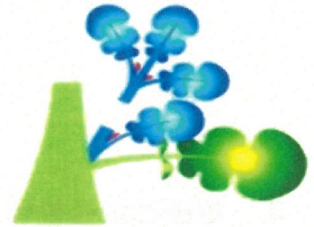
主枝収穫 (摘心)



本葉が約15枚の時本葉を8枚残して収穫またはピンチする。

わき芽収穫 (1次側枝)

枝もとの葉を1～2枚残して収穫。
立ち芽数/8～12本



孫わき芽収穫以降 (2次側枝)

わき芽の元葉を1枚残して収穫。
立ち芽数/8～12本



- 10aあたり収量 / 1600～2000kg
- 1袋あたり入り本数 / 10本～15本

6 追肥

(1) 収穫開始後から、畝中央のマルチを切り開き、10～14 日間隔（月に 2～3 回程度）で追肥する。年内・春先は NK 化成 2 号を、厳寒期は燐硝安加里 S646 を施用する。

- ① 土壌が乾燥している場合、肥料の効きが遅いので、降雨前後に追肥する。

* 燐硝安加里 S646 は雨で流亡しやすいので、降雨前には施用しない。

(2) 厳寒期は、低温と肥料切れでアントシアンが発生するため、追肥間隔が開かないように注意する。

(3) 最終追肥時期は、最終収穫の 2～3 週間前を目安とする。ただし、後作が水稻の場合は、残肥で水稻が倒伏する可能性があるため注意する。

7 病虫害防除

(1) 害虫は、アブラムシ類、ハスモンヨトウ、アオムシ等に注意する。害虫の早期発生に努め、早めに薬剤散布を行う。葉裏までかかるように散布すると効果的である。

(2) 病害は、根こぶ病、根朽病、べと病に注意する。過去に根こぶ病、根朽病の発生したほ場では連作を控える。

べと病については、降雨後に発生が増加するため、予防防除を励行する。

(3) 農薬使用の際は必ず登録内容を確認し、希釈倍数、使用時期、使用回数等を遵守する。

※農薬散布時はラベルを確認しましょう。

	薬剤名	適用病害虫名	希釈倍数 使用量	使用時期 (収穫前)	使用 回数
殺菌剤	ネビジン粉剤	根こぶ病	20~30kg/10a (全面土壌混和)	は種又は 定植前	1回
	ヨネポン水和剤	白さび病、軟腐病	500倍	14日前	3回
	ランマンフロアブル	白さび病	2000倍	3日前	3回
	コサイド 3000	黒腐病、軟腐病	2000倍	—	—
	Zボルドー	べと病、黒腐病 軟腐病	500倍 500~ 1000倍	—	—
殺虫剤	ガードバイトA	ネキリムシ類	3kg/10a (株元散布)	生育初期	3回
	モスピラン顆粒水溶剤	アブラムシ類	4000倍	14日前	1回
	スタークル顆粒水溶剤		3000倍	3日前	2回
	ウララDF	アブラムシ類	4000倍	前日	2回
	アフーム乳剤	ハスモンヨトウ、 コナガ	1000~ 2000倍	7日前	2回
	フーモン	うどんこ病 アブラムシ類	1000倍	前日	—
	デルフィン顆粒水和剤	ハスモンヨトウ、 コナガ	1000倍	発生初期但し、 前日まで	—
	フェニックス顆粒水和剤	コナガ	2000~ 4000倍	前日	2回
	ディアナ SC	ハスモンヨトウ、 コナガ	2500~ 5000倍	前日	2回

※ラベルにある作物名は「野菜類」「非結球あぶらな科葉菜類」「なばな類」のいずれかの記載のある欄の使用基準で使用しましょう。

※「なばな類」の記載がある場合は「なばな類」の使用基準、「なばな類」の記載がなく「非結球あぶらな科葉菜類」の記載がある場合は「非結球あぶらな科葉菜類」の使用基準で使用しましょう。

